

【研究ノート】

在欧博物館所蔵日本貨幣の調査

A study of Japanese coins held in European museums

櫻木 晋一

SAKURAKI Shinichi

はじめに

筆者は2001年4月にケンブリッジ大学へ留学して以来、研究の一部としてヨーロッパ各国の博物館や研究機関に所蔵されている日本古貨幣のデータベースを作成し、それらの公開作業を今日まで継続的におこなってきた。本稿では、これまでの作業とその成果を簡単に振り返りながら、この分野での研究足跡を文字記録として残していこうとするものである。

日本史の研究者としては、いかに歴史に関する一次資料を整理して、誰でもが使える形にするかが重要な研究課題のひとつである。筆者にとって、海外に散在する日本貨幣の情報を集約して可視化することはその一端であり、さらには、そこに資料が収蔵された経緯などを明らかにすることで、日欧関係史の一局面を考察する素材を提供することになるのではないかと考えている。研究の出発点となった考古資料である出土貨幣のみならず、研究対象を博物館所蔵資料までも含めたことで、筆者は「貨幣考古学」を学問の一分野として確立したいと考えている。

ヨーロッパ各国の研究施設に所蔵されている日本貨幣は、時期的に早いものでは江戸時代に流出したものが存在する。西洋人の日本研究にとって書物や植物と並び古銭もその研究対象となっていた関係で、江戸時代には長崎のオランダ商館を経由してヨーロッパに日本貨幣が渡っているのである。日本でもその名が知られているケンペルやツィンベリー、シーボルトなどは古銭収集に関わった代表的な人物で、彼らは日本文化の産物として貨幣を位置づけようとしたことを理解しておきたい。

以下で、筆者がこの四半世紀に実施したおもな博物館調査をまず概観し、次にその中でも特筆すべき日本貨幣について若干の説明と考察を加えることとする。

I. 世界の貨幣博物館

世界の歴史を見渡してみても、貨幣はこれまでの人間社会に必要な不可欠なものであり、世界各国には貨幣博物館や貨幣に関する研究機関が存在している。ヨーロッパでは古貨幣学(numismatics)が古くからひとつの学問分野として確立されており、日本における収集家の趣味的学問であるという認識とは一線を画して捉えられている。当然、それらの研究機関では自国の貨幣を中心としたコレクションを収集・整備しているが、外国貨幣についても体系的に収蔵されている機関が多い。収蔵されている貨幣は基本的には地域別に仕分けされ、多くのキャビネットに分割・保管されているのが通例である。(写真1)

例えば、良質な貨幣コレクションを所蔵する機関をあげると、五大コレクションとしては、British Museum, London、Cabinet des Medailles, Paris、Münzkabinet, Berlin、American Numismatic Society, New York、Hermitage Museum, St Petersburgがあげられる。その他にも大学等の主な研究機関として、

Ashmolean Museum, Oxford, Fitzwilliam Museum, Cambridge, Nationalmuseet, Copenhagen, Staatliche Münzsammlung, München, Kunsthistorisches Museum, Wienがあり、その他にも Rome, Milan, Madrid, Athens, Brussels, Leiden, Stockholm, Moscow, Budapest, Washington DC など各都市の博物館をあげることができる。

これらの中から、筆者が過去に実見調査を実施したおもな機関について、以下にその概要を述べていくこととする。



写真1 フィッツウィリアム博物館のコインキャビネットと日本貨幣の収納状況

1. ケンブリッジ大学フィッツウィリアム博物館

ケンブリッジ大学には numismatics の碩学であるフィリップ・グリアソン (1910-2006)¹がこの博物館に在籍していたことから、収蔵している貨幣コレクションはヨーロッパでも有数のものとして知られている。とりわけ、ギリシャ・ローマのコインについては希少性の高いものを所蔵している。日本貨幣に目を転じると、残念ながら希少品とよべるものは存在しない。同博物館には東アジア貨幣を専門とするスタッフがおらず、筆者が留学した時からそのデータベースの作成を委ねられている。東アジア貨幣では数量的に中国貨幣が多く、日本貨幣以外にも朝鮮・ベトナム貨幣が相当数収蔵されている。

筆者は、これらの国々の銭貨について、以下に示す通り、英文共著の形で報告をおこなってきた。英語で発信することにより、西洋人に日本貨幣そのものを理解して欲しいとの思いがあり、資料を提供してくれた貨幣部研究部長 (Keeper) への謝意を示すため、すべて彼らとの共著としている。

- Shinichi Sakuraki・Mark Blackburn 「Japanese coins in the Fitzwilliam Museum, Cambridge」『下関市立大学論集』第45巻第2号、2001年、21～33頁
- Shunji Ouchi・Shin-ichi Sakuraki・Mark Blackburn 「Chinese Coins in the Fitzwilliam Museum, Cambridge, with a Statistical Analysis of Weights of the Coins」『下関市立大学創立50周年記念論文集』2007年、195～228頁
- Shunji Ouchi・Shinichi Sakuraki・Mark Blackburn 「Vietnamese Coins in the Fitzwilliam Museum, Cambridge」『下関市立大学論集』第51巻第1・2・合併号、2008年、115～126頁
- Shunji Ouchi・Shinichi Sakuraki・Adrian Popescu・Yuriko Abe 「Vietnamese Coins in the Fitzwilliam Museum, Cambridge (II)」『下関市立大学論集』第57巻第1号、2013年、73～98頁

筆者の留学当時に所蔵されていた日本貨幣は、近代貨幣や通貨ではない絵銭²を除くと144枚あり、最初の仕事としてこのデータベース作成に取りかかった。このコレクションは、誰かが体系的に集めたといった性格のものではなく、ケンブリッジ大学関係者が個々に所有していたものを、大学

1 Philip Grierson は、この分野の基本文献である『Numismatics』(Oxford University Press, 1975年)を著わしている。

2 銭貨と同様に円形方孔のものが多く、福神像、駒、家紋、念仏などが鋳出された貨幣類似品で、コレクターの収集対象になっている。

の中央博物館であるフィッツウィリアム博物館に集めたといった感がある。現在ではそれから約25年の時が経過したことによって、資料の枚数は増加しており、新しいデータベースを作成中である。日本の中世期は、国内で貨幣を鑄造しておらず、中国銭などを輸入して使用していたので、この史実を意識して、次に唐代から明末までの中国銭貨710枚のデータベースを作成した。第二論文では、円形方孔の銭貨は鑄造品であるために重量の均質化が難しく、所蔵資料の重量データを利用して、統計学的に銭貨一枚が目指していた重量を推測するという新視点を盛り込んでいる。その次は、筆者がベトナムのハノイで出土銭調査に加わるようになったこともあり、ベトナム銭貨679枚のデータベースを作成した。ベトナムは中国や日本と同型の円形方孔銭を使用している国なので、研究手法は日本と同様で通用するのだが、発行されていた銭銘はまったく別物であり、最初はどのような銭種が存在するかも知らない状態であった。しかし、実物資料を手にとって丁寧に観察する機会を得たことで、この作業は自分自身の観察眼を養うことと研究の深化に役立った。また、論文化していないものの、朝鮮の銭貨2,654枚についても実見調査を終了している。朝鮮半島では、木綿が貨幣として機能していた時期が長く、銭銘としては東国通寶・東国重寶・海東通寶・海東重寶・三韓重寶・朝鮮通寶がわずかに含まれるものの、17世紀後半以降の常平通寶が大半である。しかしながら、背面に記された鑄造場所や記号などは非常にバラエティーに富んでいることを、実物資料の観察から理解できた。2024年現在、筆者はここでの最後の作業として、中国清朝の銭貨についてデータベースを作成中である。清朝銭貨の背面右側には鑄造場所が示されているものが多く、どこで銭貨が鑄造されていたかを知ることができるという利点がある。このことが、ハノイで出土銭の整理をしていた時に、清朝銭については首都の北京ではなく雲南で鑄造していたものが多いことに気づき、銭貨の生産と流通という課題を考える上で実証材料となったことを書き記しておく³。博物館資料の観察は出土銭貨の研究にも役立った例である。

大学博物館が所蔵している貨幣は学生の教育用にも活用されている関係で、フィッツウィリアム博物館の日本貨幣もケンブリッジ大学で日本史領域を教える際に貴重な教材となっている。そこで、筆者はフィッツウィリアム博物館所蔵の日本貨幣についてすべての種類を網羅するため、不足しているものについては新たな資料の寄贈やその依頼活動もおこなってきた。例えば、北九州市の鬼木家から提供された丁銀や金貨、名古屋市の横地氏から提供された藩札類などがある。鬼木家⁴から寄贈された丁銀は骨董的価値が高価なものであり、それまで同博物館には所蔵品がなく、日本近世の秤量貨幣である銀貨を理解するためには大変貴重な資料となった。藩札については、横地氏⁵から寄贈を受けるまではわずか「銀壹匁」（泉州長澤用所）の私札が1枚しか所蔵されておらず、かなりの種類を揃えた現在では、近世日本の貨幣史を語る際にこれらの藩札類は必要不可欠なものとなっている。

最後に、日本史上「ペリー来航」で有名なマシュー・ペリー Matthew Perry (1794-1858) はコインのコレクターだったことを付け加えておく。そして、ペリーが所有していた寛永通寶2枚が、この博物館に収蔵されている。1枚は一文銭で、他の一枚は明和期の四文銭である。これら2枚の寛永通寶はごくありふれたものであるため、おそらく彼が来日した時に、たまたま入手した流通銭を保管していたものと推測される。

3 昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.12 『ベトナム北部の一括出土銭の調査研究』（2008年）と Vol.16 『ベトナム北部の一括出土銭の調査研究2』（2012年）にその成果が報告されている。

4 鬼木信章・扶美子夫妻から、先祖伝来の二分金41枚（安政1、明治40）、秤量銀貨18個（享保丁銀5、享保豆板銀13）、一分銀35枚（天保4、安政31）、一朱銀35枚（嘉永7、安政28）、銭貨7枚（寛永通寶3、洪武通寶2、永楽通寶2）の寄贈を受けた。これらの文化財的価値にご理解をいただき、研究機関への寄贈を快諾いただいたことに対して深謝いたします。

5 横地誠人氏からは、2023年に69枚、2024年に137枚、合計206枚の藩札類の寄贈を受けた。現在では、同博物館所蔵藩札類の点数はヨーロッパで有数のものになっている。ここに深謝いたします。

2. オックスフォード大学アシュモリアン博物館

アシュモリアン博物館の所蔵貨幣については、オックスフォード大学ホームページから The Heberden Coin Room に入ると、日本貨幣データベースもインターネット上で閲覧できる (<http://hcr.ashmus.ox.ac.uk/collection/8>)。同博物館内での日本貨幣が展示されている写真を載せておく。(写真2) 筆者は、この日本貨幣に関する情報をオンライン上にアップする際の鑑定に協力したので、その全貌を簡単に述べる。

日本貨幣として収蔵されていた資料を分類した結果、展示中の5枚と中国銭9枚、安南銭1枚、安南手類銭10枚、また、模造品、玩賞品、用途不明品、絵銭など15枚を除く1,404枚のうち、明治以降の近代貨幣を除く日本貨幣は1,279枚であった。その特徴点は、古代貨幣であるいわゆる皇朝銭が766枚と約6割にも及び、そのほとんどは出土品で占められていることである。特に、富壽神寶の数は230枚と突出しており、一般的な皇朝銭全体に対する富壽神寶の割合と比較して著しく高い。また、飛鳥池遺跡からの出土品と同タイプの富本銭が1枚含まれていた。火を被ったものか若干表面に歪みを生じているものの銭文や七曜文は比較的明瞭に確認できる。隆平永寶の二水小字、富壽神寶の示神大字はその希少性が極めて高い。収蔵されている各銭種に関して言える点は、コレクションの内容にやや偏りがみられることである。これらの大半は朽木昌綱の旧藏品と考えられ、このことはおそらく次項で述べる大英博物館所蔵の朽木昌綱コレクションの収納過程と関連があるものと考えられるが、現時点では明確なことを述べることはできない。なかでも、大世通寶、世高通寶、金圓世寶の琉球銭に関しては現在細分されている個々の種別の多くを網羅しており、バランスのよいコレクションといえる。「鳥銭⁶」は65枚収蔵されているが、天吉用寶や晴平元寶など希少性が高い品を多く確認できる。鳥銭はその文字の特徴から朽木昌綱が著した『和漢古今泉貨鑑』(1798年)中に掲載されている原品と比較することによって彼の旧藏品であることを特定できる。寛永通寶は全部で196枚と数的には少ないが、希少なものが多く含まれている⁷。

アシュモリアン博物館には、英文の日本貨幣に関する冊子(写真3)や朽木昌綱が使用していた漆製コインキャビネットなどの収集用具も収蔵されており、今後はそれらも含めた総合的な調査が必要であると考えている。



写真2 アシュモリアン博物館での展示 (金銀銭貨と札)



写真3 表題に日本貨幣カタログとある

3. 大英博物館

大英博物館に所蔵されている日本貨幣1,325点については、筆者らが下記の冊子を刊行しており、大英博物館ホームページのオンライン上でも日本貨幣のデータやこのカタログを見ることができる。

Shinichi Sakuraki, Helen Wan and Peter Kornick with Nobuhisa Furuta, Timon Screech and Joe Cribb 『Catalogue of the Japanese Coin Collection (pre-Meiji) at the British Museum 大英博物館所蔵日本貨幣カタログ』(British Museum、2010年)

6 政府が発行した正式な銭貨ではなく、いつ・どこで作ったか不明のものを収集界では鳥銭と呼んでいる。

7 筆者が研究を始めた当初から、古銭学的細分類については古田修久氏にお願いしており、このコメントも古田氏によるものである。ここに深く謝意を表します。

大英博物館が所蔵している日本貨幣コレクションのもっとも重要な点は、丹波福知山藩主であったコレクター大名として有名な朽木昌綱(1750-1802)のコレクションが含まれていることである。幕末に福知山藩の財源補填のため売却されたとされる昌綱コレクションは一時所在不明となっていたが、2001年に大英博物館にあることが日本で新聞報道された。筆者は留学直前このニュースに接し、留学中にケンブリッジからロンドンまで実見調査のために通った結果、出版までにはかなりの時間を要したもののデータベースが完成したのである。

ここで、朽木昌綱について若干の解説を加える。昌綱はオランダ語に精通しており、京都大学に残されているオランダ商館長ティチング宛ての書簡からもそのことをうかがい知ることができる。蘭学の師匠は前野良沢で、彼は大槻玄沢のスポンサーとなり、当代一流の蘭学者たちと交わっていた。地理書である『泰西輿地図説』(1789年)や西洋貨幣に関する『西洋錢譜』(1790年)を著わしていることから、彼は学者大名であったとすることもできる。3回来日しているオランダ商館長ティチングとの交際も、彼の蘭学向上や古銭の収集にとって有益であったと考えられる。ティチングは安永9年(1780)と天明2年(1782)の2回参府しており、彼らはこの時に接触した可能性が高く、ティチングが離日した後も二人の文通が続いたことは残された書簡から分かる。

ここで大英博物館が所蔵している日本貨幣について述べる。まず、希少な富本銭3枚が所蔵されており、古代銭貨から幕末の貨幣まで日本貨幣がバランスよく網羅されている。富本銭は昌綱コレクションに含まれていたもので、飛鳥池遺跡タイプ2枚だけでなく、藤原京タイプ1枚も含まれている。古代銭貨では富壽神寶の母銭(写真4)と、大判3枚、5両判2枚、小判35枚などの金貨、丁銀8個、豆板銀69個などの銀貨も多数含まれている。この富壽神寶の小様母銭は研究上、極めて貴重なものである。これは文字が通常のものより僅かに大きく、銭貨の文字や輪、郭以外の谷の部分が一様に鋭利な刃先で鑄肌を平滑に加工した痕跡が残っており、穿の内側も特に丁寧にヤスリで仕上げられている。古代銭貨の母銭については、現時点では国立奈良文化財研究所が所蔵する和同開珎の母銭の存在が1枚知られているのみであり、今後さらなる発見が待たれる。また、昌綱は当時の流通貨幣である寛永通寶にも高い関心を示していたようである。鑄型作成のために使用する母銭を多く収集しており、その中には母銭の原型である彫母銭もみられ、かなり精力的にこれらを収集していた様子が伺える。彫母銭、錫母銭、銅母銭と製作段階的に収集されていることから(写真5)、そのことを察することができる。先述した『和漢古今泉貨鑑』の刻図や『彩雲堂蔵泉目録』(1788年)などと現品との比較から、この資料は昌綱の収蔵品の主たる部分を含むコレクションであることが確認でき、古銭学を研究する上で重要な銭貨を数多く含んでいる。また、この昌綱コレクションは、1884年にディーラーのWillsから購入したものであることが分かっている(写真6)。右のチケットに84.5.11.Wills (Tamba) 207とあり、1884年5月11日の日付と丹波コレクション207番であることが書いてある。



写真4
富壽神寶の母銭
(大英博物館
カタログ135頁)

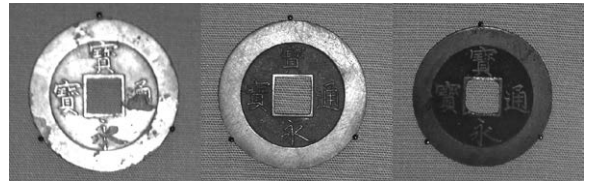


写真5 寶永通寶の錫母から銅母、流通銭の段階的展示(大英博物館)



写真6 昌綱コレクションの永楽通寶金銭
(大英博物館カタログ51頁)

2024年度の調査では、祝賀行事の際や遊具として作られるなどした絵銭 (charm) のデータベース作成に取りかかった。これらの絵銭は同博物館ホームページ上の Collection Online で検索が可能である。これにアクセスすると408個のアイテムがヒットするものの、画像写真がほとんどアップされていないので、現物を実見する必要がある。筆者が過去に調査した163枚のうち、84枚が昌綱コレクションであった。今回の調査で、日本絵銭についても昌綱の収蔵品の主たる部分を含むものであることが確認できた。また、藩札類については写真が載せられていないものもあるが、226枚のデータが公開されている。

この資料には一部は玩賞判も含まれており、詳細な内容についてはカタログを確認されたい。後述するが、朽木昌綱コレクションではないものの、東インド会社の獅子マークが刻印された小判2枚を所蔵していることも特筆すべきことである。

4. イエナ大学

ドイツのイエナ大学には、日本史上有名なフィリップ・フォン・シーボルトの次男であるハインリッヒ・フォン・シーボルト (1852-1908)⁸が収集した日本貨幣が収蔵されている。ヨーロッパにおける一般的な貨幣のデータ管理は、写真6で示したように小紙片に貨幣名や法量、来歴などが書かれたチケットとよばれるものが貨幣に添えられているのが常である。しかし、この収蔵貨幣についてはデータ化されており、貨幣の検索等が容易にできる。この貨幣リストから日本貨幣125枚を確認できる。金貨については天保二朱金を確認できるものの、これ以外の金貨と銀貨を所蔵しているか否かは不明であり、今後確認の必要がある。当時、シーボルトは高名な収集家として知られていたのに、金銀貨がほとんど含まれていないのは不思議だからである。リストに掲載されているものの大半は銭貨であり、和同開珎以下の古代銭貨から近世の慶長通寶、元和通寶、長崎貿易銭、寛永通寶や幕末近くの天保通寶、文久永寶など、銭貨については網羅されている感がある。また、大隅国で鑄造された加治木洪武通寶、叶手元祐通寶や琉球銭も収蔵されている。珍しい収蔵品としては、「元通国吉」と鑄出された銭貨が1枚存在する。これは近世になって北九州市黒崎地区で鑄造されていたと記録⁹に残る銭貨銘を刻んだもので、正式な通貨としては存在しない。コレクター用に作られたものであろうか。筆者はここに収蔵されている資料を実見したが、その結果についてはまだ公開できていない。

5. スコットランド国立博物館

スコットランドの首都エジンバラに所在するこの博物館は、収蔵庫が郊外の別のところにあり、筆者らは2022年夏にそこを訪ね実見調査をおこなった。博物館での展示品については小判2枚を見学したが、(写真8)手に取って実見していないので、全点について細部にわたる観察はできていない。博物館によって作成された日本貨幣の一覧表から166枚の日本貨幣を確認できるが、近代貨幣も75枚含

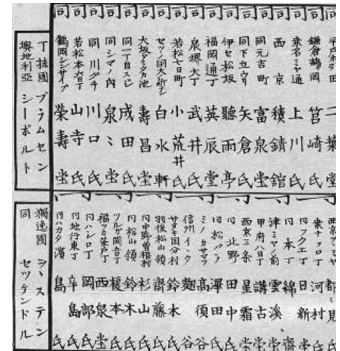


写真7 左の番外にデンマーク国 プラムセン、オーストリアシーボルトの名が見える (明治13年版『愛古銭』)



写真8 スコットランド国立博物館の展示

8 Heinrich von Sieboldは外交官であるが、考古学者としても知られており、1869年に来日している。明治13年(1880)の古銭番付にもその名を確認できる。(写真7)

9 『筑前国統風土記』(1703年)に「錢屋圃は熊手にあり いつの頃の事にや むかしこの所にて錢を鑄けるという その錢の銘は元通国吉とありしかや」とある。

まれている。代表的なものをあげれば、万延小判2枚、甲州金1枚、天保丁銀2個、一分金、二朱金などの金判、秋田の四匁六分銀判、南鐮二朱銀などの銀判も含んでいるが、豆板銀は所蔵されていなかった。また、寛永通寶や天保通寶、文久永寶などの銭貨類もあるが、コレクションとして充実しているとは言い難い。藩札類も額面が銭五百文、米五升預、銀壺匁と書かれた3枚を所蔵している。

この調査でもっとも印象的だったことは、墨書が消え、金色の輝きを失った万延大判を実見したことである。最初は本物の大判とは思えないほどくすんだ黒褐色であった。背面左下にある座人印3個は「吉・き・宇」とあるので正品と考えられるが、その発色と墨書がなかったことにかかなりの違和感を覚えた。担当の学芸員にこのことをたずねると、「墨書はあったが消えかかっていたのですべて消してしまった」と記録にあるとのことであった。黄金色を失っている原因は、本来は色揚げをして黄金色に輝いていたけれど、表面の金がすり減って消滅した結果であろうと推測できる。色揚げとは、金銀の合金である金貨の表面にある銀を溶かして金色にする日本の加工技術である。具体的には、完成した金貨の表面に薬剤を塗布し、それを焼くことで表面にある銀が溶け、黄金色に輝く。改鑄によって銀の含有率が多くなると白っぽくなるので、このような処理をするのである。

6. オランダ銀行貨幣資料室と民族学博物館

オランダ銀行貨幣資料室には東インド会社獅子カウンターマーク入り小判1枚が所蔵されており、これはインターネットで確認することができる (<http://www.dnb.nl/en/about-dnb/nationale-numismatische-collectie/index.jsp>)。この資料はかつてユトレヒト貨幣博物館に収蔵されていたものであり、現在はオランダ銀行貨幣室が所蔵している。この貨幣資料室は現在 Hoofddorp の仮収蔵庫にあるが、来年アムステルダムに本収蔵されるのを待って、本格的な所蔵品調査を始める予定である。また、現在改修中のアムステルダム博物館 (Amsterdam Museum) にも日本貨幣が所蔵されているとの情報を得ており、これも来年度に調査予定である。さらに、ライデンにある民族学博物館 (Museum Volkenkunde) には、出島オランダ商館などを通して近世日蘭関係の中で入手した貴重な多くの資料が収蔵されていることが知られている。今年度の調査で、ここにも日本貨幣が所蔵されていることを確認できたので、来年度から本格的な調査にとりかかることにしている。ここにはフィリップ・フォン・シーボルトの貨幣コレクションの一部が所蔵されていることが特筆される。ただし、彼の貨幣コレクションはヨーロッパ各所に散逸している可能性が高く、全貌を把握するには困難が予想される。

7. スウェーデン王立貨幣博物館

ストックホルムにある王立貨幣博物館には、ツインベリーコレクションが所蔵されていることが特筆される。ツインベリー (Carl Peter Thunberg : 1743-1828) はスウェーデン人の医師で、オランダ商館にやって来た人物である。彼は帰国後、ストックホルムのスウェーデン王立アカデミーで日本貨幣史に関する講演を初めておこない、その内容は32頁と薄いですが、1779年にスウェーデン語で冊子として出版されている¹⁰。2018年に筆者らが訪問した時には、大判や小判2枚、丁銀を含むツインベリーコレクションは館内に展示されていた(写真9)。収蔵品については古代銭貨が含まれて



写真9 スtockホルム王立貨幣博物館の展示(大判と小判が右上に、右下に丁銀)

10 『Intradedes-Tal, om de Mynt-Sorter Som i alder och sednare tider blifvit slagne och varit gangbare』(和訳:『過去や現代の日本で通用している貨幣諸種類序説』) ドイツ語版、オランダ語版も出ている。

おらず、近代硬貨19枚を含むものの146枚が確認できる。しかし、展示品も含めた全点を確定させるために、2025年度に再訪を予定している。また、ここに所蔵されている札類11枚については、拙稿¹¹にそのデータを載せており、わが国最古の私札である山田羽書銀壺匁札(1770年)の希少品が1枚含まれていることを記しておく。

8. デンマーク国立博物館

デンマーク国立博物館には、ウィリアム・ブラムセン William Bramsen (1851-1881)が蒐集した日本貨幣を中心としたコレクションが収蔵されている。しかしながら、筆者が2018年2月に初めて現地で調査をおこなうまで、その詳細については知られていなかった。このことは、デンマーク在住で長島要一氏のように優れた日本人の歴史研究者が存在するものの、貨幣そのものの研究は古銭学的な専門知識を必要とするために難しいことを示している。筆者が2020年3月に三度目の訪問をして以降、コロナ禍の期間はまったく調査ができなかったが、その間はファイル転送サービス「We-transfer」を利用して、博物館スタッフと写真画像のやり取りをおこなうなどして、ようやく2023年6月に下記カタログの刊行までこぎつけた。(写真10)

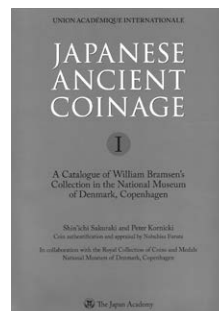


写真10 デンマークカタログ(日本学士院、2023年)

Shin'ichi Sakuraki and Peter Kornicki, *Coin authentication and appraisal by Nobuhisa Furuta* 『Japanese Ancient Coinage I A Catalogue of William Bramsen's Collection in the National Museum of Denmark, Copenhagen』(The Japan Academy, 2023年)

最初に筆者らが同博物館を訪問したとき、日本貨幣は100年以上前のオリジナルコインキャビネットに収蔵されていたが、現在は新しいトレーに整理・収納されている。筆者がデンマーク国立博物館に収蔵されている日本古貨幣コレクションカタログを作るきっかけになったのは、先述の大英博物館カタログを作ったことによる。大英博物館の英文日本貨幣カタログはヨーロッパで活用されているようで、筆者らの仕事は広く知られているものと思われる。ただし、これは大英博物館が主体的に作り上げた日本貨幣カタログであり、今回のデンマーク国立博物館カタログは日本学士院から金銭的補助も含め研究助成を受け、筆者が出版社の助けを借りながら編集作業を主体的におこなった、日本側の記念碑的作品であることを記しておく。

デンマーク国立博物館の日本関係資料は、ブラムセン旧蔵の古銭書類と1,278枚の貨幣とで構成されている。貨幣については、オットー・クレプス(Otto Krebs)のもの118枚、残りの1,160枚の大半はブラムセンの旧蔵品である¹²。なかには「玩賞品」や「模造品」も少なからず含まれるが、明治初期の頃は地方で発行された金銀貨に対する真贋に関してはまだ研究がそれほど進んでいなかった段階であり、当時これらは本物として扱われていたものも多かったと想像できる。

所蔵貨幣の内訳は金貨が238枚で、さらにこれを細分すると大判2枚、五両判2枚、小判28枚、二分金などの金判92枚、甲州金38枚、玩賞金判76枚となっている。銀貨は254枚で、その内訳は丁銀27個、豆板銀120個、切銀9個、銀判52枚、地方銀貨27枚、玩賞判19枚である。銭貨については722枚で、その内訳は古代銭貨(和同開珎17枚を含む)64枚、寛永通寶386枚(母銭156枚を含む)、寶永通寶5枚、天保通寶6枚、文久永寶21枚、その他240枚となっている。和同開珎(708年)から貞元大

11 「中近世移行期の貨幣事情 - 九州地方を中心に」加藤慶一郎編『日本近世社会の展開と民間紙幣』(塙書房、2021年、263頁)

12 『デンマーク国立博物館カタログ』9頁右に、国王の旧蔵品6枚に日本貨幣が含まれていたとあり、デヴィジコレクションにも4枚日本貨幣が含まれていたようなのだが、現時点ではそれらを特定できない。

寶(958年)までのいわゆる皇朝十二銭はすべて揃っている。ひとつだけ銭貨について特徴的なことをあげるとすれば、ほとんど研究がなされていない幕末の試鑄貨が多く含まれているので、この分野の研究を進展させるためにはこれらの資料は役立つものと思われる。ブラムセンは明治13年(1881)に没しているのに、明治初期の金貨、銀貨、銅貨が20枚含まれているということは、当時の日本で使用していた通貨を持ち帰ったということである。最新貨幣が明治11年(1878)の五円金貨であり、これは彼が持ち帰ったものであるということと年代的に矛盾しない。

また、外国貨幣(中国・韓国・ベトナム)も44枚含まれている。これらの貨幣については、意図的に集めたというより、日本貨幣を収集する中で一部混じっていたということであろう。

特にコレクションとして希少なものをあげると、近世の金貨では佐渡小判(写真11)や佐渡一分金各1枚があげられる。これは『月旦衆評泉譜』¹³19号に拓本が掲載されている。銀貨では、『月旦衆評泉譜』14号に掲載されている次字切銀は『金銀図録』巻四に加賀国古極印切銀としている品で、状態も良く切銀の中でも希少性が高い。(写真12)これは当時の銀貨は重さを計って切り遣いされており、形が決まっていないのである。日本の金銀貨は中世末から近世にかけて、重さを計って使用する秤量貨幣から枚数を数えて使える計数貨幣に変化することを知っておきたい。



写真11 佐渡小判(デンマークカタログ178頁)背面上に「佐」がある。表に黒でWBと書いてあるがWilliam Bramsen のことである。



写真12 切銀の拓本(『月旦衆評泉譜』14号)

9. パリ国立図書館

フランス陸軍の軍人である Étienne de Villaret (1854-1931) が1884-89年の日本滞在中に収集した日本貨幣は、パリ国立図書館に収蔵されている。筆者らが10年前におこなった調査では、810枚の日本貨幣資料の存在を確認している。今後、ここの資料については日本学士院の『カタログ第Ⅱ巻』として出版予定である。

簡単にその内容を述べると、銭貨については古代銭貨の和同開珎以下十二種類の銅銭がすべて揃っており、万治2年(1659)から長崎で貿易専用銭として鑄造された長崎貿易銭の元豊通寶が57枚と多数含まれていることが注目される。また、寛永通寶のコレクションも充実しており、寛永通寶の番銭¹⁴が称芝銭「一」から「十六」まですべてが揃っている。金貨については、慶長大判1枚や近藤守重が著した『金銀図録』に載っている金銀貨の大判類や小判類も含まれており、かなり充実したコレクションであると評価できる。念仏銭、大黒銭、寛永通寶が同じ枝銭につながっている資料もあり、マニア向けの銭貨が比較的容易に鑄造されていた実態を知ることができる。

10. エドアルド・キョッソーネ東洋美術館

Edoardo Chiossone (1833-98) は、明治になって日本の新紙幣「ゲルマン紙幣」の図柄を彫刻したことが縁で、大蔵省紙幣寮に招かれたお雇い外国人であり、東京の青山霊園に彼の墓はある。(写

13 明治10年(1877)に成島柳北が東京で設立した「月旦古泉会」の会誌『月旦衆評泉譜』があり、国立国会図書館所蔵本には宇都宮(壽綱)所蔵印がある。第23号までは拓本を台紙に貼り付け、第24号からは直接台紙に拓本を打つタイプである。ブラムセンの古銭界における動向をこの月旦古泉会での活動で確認できる。

14 古寛永の背面に番号が鑄てあることからこの名があり、これは通用銭ではなく、開炉の祝鑄銭だと考えられている。

真13) キョッソーネの出身地であるイタリアのジェノバには、彼が収集した美術品を収蔵したこの美術館が存在している。筆者らは2023年夏と2024年夏の二度にわたりこの博物館を訪問し、所蔵されている日本貨幣の調査にあたった。

錢貨については、ビニールの小袋に入れられていたものを一枚ずつ実見した。金貨は甲州金、二分金、二朱金、銀貨は豆板銀、一分銀、一朱銀を合わせても33枚しかなく、大半は中国錢貨と日本の錢貨で、一部はベトナムの錢貨や絵銭も含まれていた。天保通寶が8枚付いている枝錢1

個や近代錢12枚も含め、調査枚数は1,320枚であった。日本の皇朝錢は含まれておらず、加治木洪武通寶や叶手元祐通寶、平安通寶を含んでいるが、バランスの良い丁寧な収集品であるとは言い難い。

また、彼が日本紙幣のデザインに関わっていたことから、藩札などの札類も所蔵されているのではないかと考え確認したところ、ファイルブックに収められた83枚の札類が所蔵されていた。この札類の内容については、同美術館のカタログとして近日中に刊行するため、作業をおこなっている。



写真13 キョッソーネの墓
(東京青山霊園)

II. 特筆すべき日本貨幣

上記の各博物館資料の中で取り上げたものもあるが、唯一の発見品となった富壽神寶母錢以外のモノについて、特筆すべきいくつかの貨幣に関する説明を以下に示す。

1. 東インド会社獅子刻印小判

まずは、オランダ東インド会社が支配地のバタビアを中心に流通させていた日本の小判をあげたい。これは慶長小判の面¹⁵中央に獅子の立像が刻印されているものである。現在、筆者は5枚の現品が存在していることを確認している。その2枚は大英博物館(写真14)、2枚はオランダのオランダ銀行とアムステルダム博物館、残りの1枚がイタリアのミラノ・スフォルツァ城博物館に所蔵されている。17世紀後半に日本から輸出された小判に対して獅子の刻印が打刻されているため、日本には存在しないものである。この獅子の刻印をよく観察すると、正立していなものが3枚あり(写真14右)、これはカウンターマークを打刻する際、天地を気にせずに打刻したことを示している。つまり、打刻された「一両」という日本語が読めないためにこのようなことが起こっているのである。

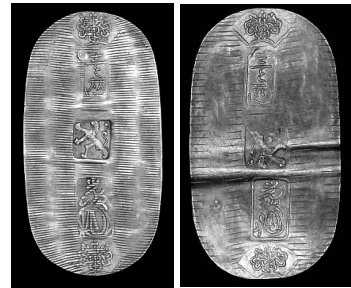


写真14 オランダ東インド会社
獅子マーク小判(大英博
物館カタログ198頁)

また、ミラノとオランダ銀行所蔵の小判には多くの小極印¹⁶が打ってあることから、日本でかなり使用された後にジャワへ流出したことを確認できる。

2. 武蔵墨書小判

これは本物であれば大変希少なものであるが、ヨーロッパに持ち出された偽作の2枚について述べる。その1枚はデンマーク国立博物館(写真15)、1枚はパリ国立図書館の所蔵品に含まれている。前

15 古銭界では表(おもて)のことを「面」、裏のことを「背」と呼ぶ。

16 小極印は両替商で品質確認のために打たれたものだと言われているが、ほとんど研究がない。慶長小判のように金の品位が高いものには多く打たれている傾向がある。

者はブラムセン、後者はビラレが明治初期の日本で収集したもので、彼らはおそらくこれらを本物であると考え、入手したものと思われる。大判には幕末まで墨書による揮毫が使用されるが、初期の小判も墨書が使用されていた証拠品である。右に武蔵、中央に壺両と花押が書かれており、膠と墨を混ぜて消えにくくした墨書であるが、使用過程で次第に文字が消えていくことは避けられない。大判は通貨ではなく賞賜用なので使用を前提にしていなかったが、小判は通貨として市場を行き来するので使用頻度が高く、墨書は消えてしまうので不都合であり、打刻に変わっていく。つまり、墨書小判は原初の形態と言えるのだが、二人は偽物をつかまされた訳である。



写真15 武蔵墨書小判
(カタログ175頁)

3. 太閤円歩金

これも本物であれば希少なもので、西洋コインのように円形の金貨である。表の中央には五三の桐紋、裏の中央には花押、両面とも外周に向かって5つの桐紋が打たれ、縁辺には削り取り防止のためと考えられる小円点が巡っている。桐紋や花押という日本のものを除けば、形状は16世紀後半以降の西洋との接触を感じさせる貨幣である。(写真16)



写真16 太閤円歩金(デンマークカタログ183頁)

4. 開基勝寶

開基勝寶は760年に最初の改鑄がおこなわれた際、銅銭の万年通寶、銀銭の大平通寶と同時に発行された金銭であり、日本史上最初に発行された金貨である。模造品ではあるが、開基勝寶金銭(写真17)が1枚ブラムセンコレクションに含まれているので、これについて記しておく。これは760年に発行された金銭のコピーであるが、金工家の加納夏雄が奈良西大寺出土の開基勝寶を基に原型を彫刻、名越弥五郎が鑄造したもので、所在を確認できるのはこの1枚だけである。西大寺からこれを皇室に献上するに際し、金銀銭10個(あるいは12個ともいう)の模造品を製作している¹⁷。そのうちの1枚がブラムセンのコレクションに加わっていたのである。



写真17 開基勝寶
(デンマークカタログ172頁)

5. 富本銭

富本銭は近年まで絵銭として認識されていたが、1998年の飛鳥池遺跡の発掘成果から、日本最初の鑄造貨幣であることが定説となった。これは筆者が大英博物館資料を実見する直前のことであり、大英博物館でも絵銭として分類されていた。しかし、カタログを作成する2010年段階では、藤原京タイプとともに通貨と位置づけてカタログに収録した。筆者としては、最新の研究成果をカタログに反映させることができたのでホッとしている。アシュモリアン博物館の1枚を含めると、イギリスで4枚眠っていることになる。(写真18)

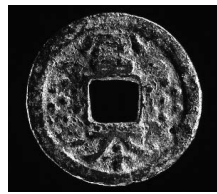


写真18 富本銭(大英博物館カタログ133頁)

17 小川浩編 1964『日本貨幣圖史』第1巻、大成堂

6. 元通国吉

これはイエナ大学に1枚所蔵されており、ここでは中国の絵銭と分類されている。背面には何も文字がなく、径は25mm、重さは2.53gである。筆者はこの銭貨について、北九州市黒崎の発掘銭の調査過程でその銭銘を知ったのだが、発掘品としてはまったく見たことがなく、収集家向けの模造品である可能性が高いと考えている。また、希少品を多く集めている朽木昌綱やブラムセンのコレクションに含まれていないのも不思議である。

7. 平安通寶

これは希少銭貨とまでは言えないが、正式な通貨として発行されたものではなく、実態不明の銭貨なので問題提起のためにあげておく。筆者はキヨッソーネ東洋博物館とイエナ大学に1枚ずつ所蔵されていることを確認している。日本での出土品9枚を集成した報告¹⁸を見ると、東北地方で7枚、神奈川県平塚市で1枚、三重県桑名市で1枚が出土しており、筆者は新宿区内の近世墓から出土したものを1枚調査したことがある¹⁹。铸造時期については、出土遺構や層位から判断して近世のものであることは間違いない。また、出土銭貨の分布状態から判断すると関東以東で作られたものと考えられる。(写真19)

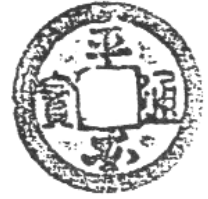


写真19 平安通寶
(高桑2001)

8. ガン首銭

キセルの火皿を叩き潰して作ったもので、廃物利用品である。真ん中に煙が通る丸い穴があり、あたかも銭貨のように見える。都市遺跡を発掘しているとガン首銭をしばしば発見できるが、西洋人にはこれが何であるのかを判別するのは難しそうである。大英博物館からこの画像が筆者に送られてきて、回答を求められた経験がある。だが、希少品を集めるコレクションの中でガン首銭を見たことはない。(写真20)



写真20 ガン首銭
(大英博物館資料)

9. 長崎貿易銭

万治2年(1659)以降に中国からの注文で作られた長崎貿易銭は、大半が元豊通寶であり、ベトナムなどの東南アジアでかなり出土する。これは日本からの輸出商品として铸造されたものであり、書体が真書である



写真21 長崎貿易銭(真書)と北宋銭(行書と篆書)

ことから、北宋銭の元豊通寶が行書と篆書なので見分けることは容易である。海外の博物館でも真書の元豊通寶は日本銭と分類されていることから、正確に認識されているものと考えられる。(写真21) この銭貨は輸出専用品ということもあり、東南アジアで発掘品として頻出するので、今後の環シナ海交易を考える上で重要となる銭貨である。

以上、9種類の貨幣について、あまり認知されていない点を中心に説明をした。

18 高桑登 2001 「国内出土の平安通寶集成」『出土銭貨』第15号 集成されている10枚のうち1枚は伝世品なので除外した。

19 ハウジングトラスト株式会社・東京航業研究書 2019 『宝泉寺跡Ⅳ』

おわりに

筆者は、出土銭貨の研究を始めてからすでに40年ほどが経とうとしている。学部・大学院時代に古代社会の構造解明に取り組み、古代社会を理解するために考古学を学び始めたので、短大教員となった後は、指導していただいた慶應義塾大学鈴木公雄教授(考古学)の研究を手助けするため、出土銭貨の研究に邁進した。しかしながら、モノ資料を研究対象としていた関係で、イギリス留学後は博物館所蔵貨幣までもが研究対象となって今日に至る。とりわけ、ヨーロッパに眠っている日本貨幣のデータベース化は他にやる研究者がおらず、孤軍奮闘に近い状態が今日も続いている。従って、研究者としてはユニークな道を歩んできたが故に、その軌跡を残しておきたいと考え、本稿を著すことにした。2019年に朝日大学へやって来てはや6年、研究環境に恵まれたことで、それまで以上に業績を残すことができたと自負している。そして、最後の職場であろう朝日大学の刊行物に、筆者の研究軌跡を残すことが義務であると考えた次第である。

本稿は2024年度朝日大学経営学部研究助成金の成果物である。ここに感謝の意を表す。

出典

大英博物館カタログ

Shin'ichi Sakuraki, Helen Wan and Peter Kornick with Nobuhisa Furuta, Timon Screech and Joe Cribb 『Catalogue of the Japanese Coin Collection (pre-Meiji) at the British Museum 大英博物館所蔵日本貨幣カタログ』(British Museum、2010年)デンマークカタログ

Shin'ichi Sakuraki and Peter Kornicki, Coin authentication and appraisal by Nobuhisa Furuta 『Japanese Ancient Coinage I A Catalogue of William Bramsen's Collection in the National Museum of Denmark, Copenhagen』(The Japan Academy、2023年)

高桑2001

高桑登2001「国内出土の平安通寶集成」『出土銭貨』第15号